

これまでの研究の経緯について

1. 平成26年度から平成28年度までの研究

個の学びと集団の学びが響き合い、自己の考えを再構築し表現する児童生徒の育成
～ICTを活用した学習指導、国際理解教育の実践～

前年度の研究の成果と課題、かつ本校の児童生徒の実態を踏まえると、個に応じた学習指導を継続して行い、基礎・基本の力を確実に定着させる課題が見えてきた。また、同時に話し合う力（表現）も身に付けさせ、自己の考え（思考・判断力）をさらに深めていく手だてを取り入れた。

そこで、基礎・基本の力の定着を目指す場を「個の学び」の中で行い、話し合う力を身に付ける場を「集団の学び」の中で行うことにした。そして、「個の学び」と「集団の学び」を連関させ（響き合い）学びの質を深めることで、「自己の考えを再構築し表現する児童生徒の育成」を目指すことにした。

ICTについては、平成26年度第40回パナソニック教育財団の実践研究助成を受けることができた。この助成により、大型テレビ3台、ビデオカメラ、ブルーレイレコーダーを購入し、各教室に大型テレビを一台ずつ配置することができた。

なお、パナソニック教育財団に提出した研究主題は「ICT活用によるイメージを表現する力の育成～和太鼓・ソーランを通して日本の伝統文化を学び、発信する実践の一例～」である。この研究も、校内研究の一部として位置付け実践した。

2 平成29年度から平成30年度までの研究

グローバル社会に対応し、生き生きと協働し学び続ける児童・生徒の育成
～課題解決型の学びを通して～

これまでの研究成果により、本校の児童生徒の学力は確実に向上してきている。また、「響き合い」をテーマにした3年間の継続研究で、話し合いの力も身に付けてきた。一方で児童生徒の学習の様子から、学習に関する意欲は高いが、生きる力につながるような学びに意欲的な児童生徒は少ないことが気にかかる。そこで、受け身の学びから、人生の充実感や学ぶ楽しみにまでつながる主体的な学びをいかに引き出すことができるかが課題であることが見えてきた。

そこで、本年度は「グローバル社会に対応し、生き生きと協働し学び続ける児童・生徒の育成」を研究主題とし、学習を生きる力につなげていきたい。

海外という地域特性を生かし、校内での全教科・領域での指導に加え、校外（日本人会での発表、現地校との交流、日本の学校との交流）での実践をとおして、今までの課題解決型学習の中で培った課題解決力やグローバルな社会を生き抜くコミュニケーション能力、協働する力を育てたいと考えている。

3 今年度の研究主題と主題設定の理由

協働し、生き生きと学び続ける児童・生徒の育成
～課題解決型の学びと主体性を促す工夫を通して～

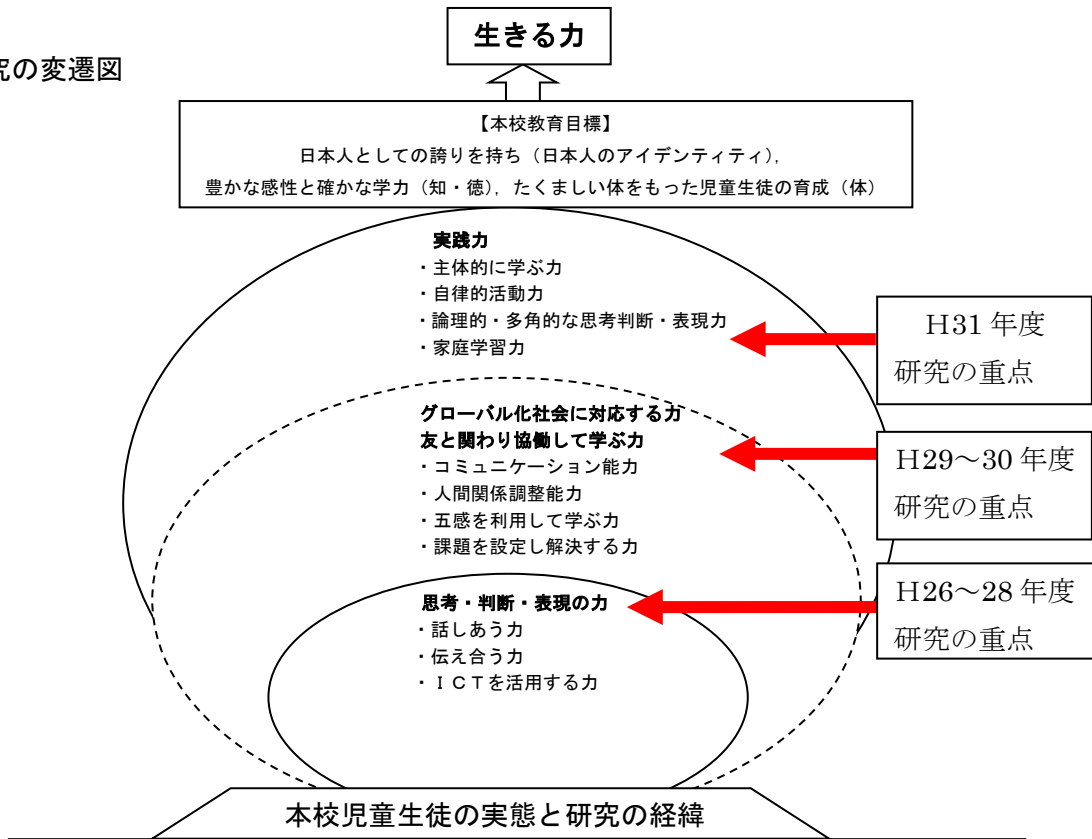
昨年度の研究では、課題解決型の学びの場を設定することで、子ども同士が協働して学びを進めることができた。また、話型やプリントを頼りにすることで、主体的に課題に取り組んだり、友達と積極的に関わり、得た知識を組み合わせ、考えを見直そうとしたりする姿が見られるようになった。一方で、協働する手段であるはずの話型やプリントを「使うことが目的」となってしまう、協働することで深めたい本来の学びにまで至らないこともあった。

そこで本年度は昨年度の課題を踏まえ、課題解決型の学びを通して、子ども同士や子どもと教師との協働の仕方を研究の柱としていきたい。

また、現在、新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」「論理的で多角的な思考」の実現が求められている。本校の子どもの実態としては、対話的な学びはあるがそこで得た自らの学びを振り返ることができなかつたり、次時の学びにつなげられなかつたりと「主体的な姿」が見られないことに課題が残る。その為、昨年度末、主体性を促す家庭学習の取り組みについても研究を深めてきている。

そこで本年度は協働の学びに加え、主体性を促す本校独自の具体的な工夫が重要と考え、副題に付け加えることとし、「協働し、生き生きと学び続ける児童・生徒の育成」を目指すこととした。

4. 研究の変遷図



- ・ 3つの力を分離・段階的に捉えず、重層的に捉えるため、3つの円を重ねて表示する。
- ・ 平成26年3月17日、文科省「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価のあり方に関する検討会」資料をもとに作成。